

二宮尊徳と現代

海外需要の回復を主な牽引役に、景気は極めて低位ながらも持ち直しへと進みつつある。また、政権交代後の「家計」重視の所得再配分政策など新規施策への期待も少なからず生じている。この動きが前向きの正の連鎖となることを期待したいものだ。しかし、日本を覆う閉塞感の雲影は濃い。強い成長志向を持つ新興国が競争力を向上させて行くなかで、グローバル競争が激しさを増すことは必至である。一方、日本は高齢化進行だけでなく人口減少時代へと突入しており、様々な社会的な蓄積は細りつつある。国内マーケットでは新規ニーズをとらえ、深掘りしていかないならば、縮小を余儀なくされる分野も少なくなる。

このようななか、今年2010年は産業組合法の成立から110年に当たるが、協同組合の精神が地域での人々の助け合いということであれば、その日本的源流を二宮尊徳(金次郎)にまでさかのぼって考えるのは自然なことと思われる。彼は、現代的に言えば希有の地域をベースにした社会再生コンサルタントとも言っていいたろうが、その実践的・現実的な方法論と思想の力は今日にも通じ、我々の先行きを照射し将来への自信を与えてくれる。

ペリー来航から三年後に世を去った尊徳の生きた時代は、幕末・維新を前に幕藩封建体制のほころびが広がり閉塞感が強まっていた時期だった。江戸・大阪などの都市の文化と貨幣経済は爛熟らんじゅくを深めつつあったが、一方で多くの農村が荒廃し農業などの生産力の衰退は厳しさを増していた時代であった。はからずも、今と重なる面も多いのである。

彼が行った地域再生の方法論である「仕法」の体系は、緻密な数量的・科学的な現状分析に基づいている。そこから計算・出発し、地域の潜在生産力を引き出すために、地域の参加型の協同態勢を構築することに注力する。そのなかでは、封建領主を含む関係者を上下関係ではなく並列的・相互作用の存在としてとらえ、話し合い・説得を重視し、投票による決定方式も用いていたことは近代的な平等にもつながるだろう。また、農業など汗をかき物作りする生産過程—「田徳」を社会の根本とし、人々が主体的な意思と行動によって社会を作り変えていくことが出来るという「作為」の大切さを唱えている。これは、単純な拡大再生産の図式にとどまらない、当時としては画期的な社会発展的思想であった。

そのなかで、尊徳は「報徳金」と言われる資金の拠出と貸出を行う相互扶助の仕組みを仕法に取り入れた。この今風に言えばマイクロ・ファイナンスは、尊徳の高弟が結成した遠州報徳社がもととなり、明治にわが国最初の信用組合的組織を作る流れとなった。

尊徳の事績や思想を学校教育などのなかで学ぶことは、残念ながら少なくなっている。しかし、極めて制約の多い時代にあって地域社会の再生を参加型協同によって成し遂げた尊徳に学び想いを致すことにより、大いなる元気と現代にも通じるヒントが与えられることになるのではなかろうか。

((株)農林中金総合研究所 調査第二部長 渡部喜智・わたなべのぶとも)